

「想史」を構想するという執筆者たちの意図にそったものと言えるであろうか。この疑問は、執筆者たちが本書を通して「二十世紀日本思想史」の、また「昭和思想史」の明確な像を提示しえたかという問いでもある。

付け加えて言えば、本書では西田幾多郎、三木清、戸坂潤、北一輝、柳宗悦の思想が取りあげられているが、その選択は、新たな観点から「昭和思想史」を構想するために、また「二十世紀日本思想史」を構想するために必要な、あるいは必須なものとして十分に根拠づけられているであろうか。また執筆者らは二十世紀の世界史の根本的な変化・変動を捉えるために「大衆」と「世界」という二つのキーワードに注目しているが、この基本視座の設定も十分な根拠を有しているであろうか。たとえば「近代化と伝統との相克」とか、「戦争」とか、別の視点設定もありえたのではないだろうか。いずれにしても、なぜ「大衆」と「世界」でなければならないのかという根拠づけに関する議論が必ずしも十分でなかったという印象を評者は抱いている。

しかし、本書が日本思想史研究の新たな地平を切り開くものであり、多くの可能性をはらんだものであることはまちがいない。以上に述べた評者の疑問に対しても、執筆者らが今後の研究のなかで明確な答を示されるであろうことを期待している。

安丸良夫・喜安 朗編

『戦後知の可能性——歴史・宗教・民衆——』

山川出版社 二〇一〇年十二月一日刊
A5判 xii+四四一頁 三五〇〇円＋税

栗 津 賢 太

本書は、「歴史・宗教・民衆研究会」（一九九九―二〇〇八年）において一〇年間継続された議論を踏まえて出版された、戦後知の系譜学の試みである。「まえがき」によれば本書は「戦後啓蒙主義の遺産を批判的に継承しつつも、それを越えてどのような思考が現在、可能になっているのか、現在から将来に至る思考の可能性を模索する試み」であり、「現在の視点から過去の知識人たちの語りを、歴史的制約を被った時代遅れのものとして批判するのではなく、その語りに添うようにして彼らの知的格闘を検証して、その痕跡に可能性を見出していくこと」を目的としている。つまり本書は知識についての知識に属する書であり、本書が参照している知識は膨大である。ここでは限られた紙枚と評者の非力を顧みず、宗教学あるいは宗教史研究において本書をいかに受け止めるべきかについて考えてみたい。

まえがき	林 淳
序 章 戦後知の変貌	安丸良夫
第1章 石母田正と敗北の思考	磯前順一
一九五〇年代における転回をめぐって	
第2章 丸山眞男の宗教理解	島 蘭 進
日本仏教史と思想史の方法論	
第3章 竹内好のイスラム観	白杵 陽
戦前と戦後のあいだで	
第4章 吉本隆明の思想と宗教	島 蘭 進
一九四〇年代から一九六〇年代まで	
第5章 村上重良の近代宗教史研究	林 淳
政教分離をめぐる生き方	
第6章 黒田俊雄の中世宗教史研究	安丸良夫
顕密体制論と親鸞	
第7章 網野善彦における絶対自由の精神	喜 安 朗
境界領域を踏破する歴史学	
第8章 色川大吉と戦後歴史学	安丸良夫
「民衆史」の構想力	
第9章 宮田登と民俗学の変貌	林 淳
挑戦する「もう一つの史学」	
第10章 柄谷行人から酒井直樹へ	磯前順一
ポストモダン思想における外部と普遍	
終 章 変貌する知識人 知と身体	磯前順一
あとがき	喜 安 朗

序章は本書が取り上げる戦後知の在り方に大きな見取り図を与えるものである。日本における戦後知は批判知として始まり、そこには希望と「悔恨共同体」があった。戦後啓蒙は、「敗戦による社会構造の転換という稀有のチャンスを生かして形成された、批判知の自立であった」。しかし、そうした精神の自律性と批判性の継承のためには「戦後知の暗黙の諸前提が再検討されなければなら」ず、「社会的現実、つまりはそこで生きている人たちの世界は、戦後啓蒙が指定したよりもっと錯綜した存在として捉え返すべきものであり、戦後日本のさまざまな学知はそのことに向き合おうとするさまざまな試みだった」と総括されている。その複雑な世界は「市場経済と利潤追求を存在原理とする複雑に交錯した複合体」であり、この構造物に規定された生を「できるだけリアルに見る必要がある」が、そのためには「生活の細部に根ざした切実さと、全体を構造的に見据える構想力・想像力が必要」であることが指摘され、生あるいは生活の「切実さ」に向きあうこと「現実の人間の生活と実践」に深く根を下ろすこと、という課題が示されている。この、研究者が向き合うべき「切実さ」は、形を変えながら本書の全体を貫く執拗低音となっている。

第1章では、マルクス主義歴史学の範ともなった『中世世界の形成』を著し、戦後啓蒙を支えた知識人である石母田正の学問と、彼が牽引した歴史学における民族運動の挫折・敗北が「民族」「実証主義」の二つの観点から検討されている。石母田の「特定の既成政党を支持するなかで運動を展開せざるをえなかった困難さとそのオプティミズムさ」が指摘される。それは

主体としての民族の捉え方と、「学問の政治への隷属」と批判された、学問の客観性という問題に起因している。本章では「学問の客観性とは、みずからの歴史性、主観的制約を引き受けたときに、その対象化の過程で確保される」ものであり、「それは忌み遠ざけるべきものではなく、みずからその世界に身をおきながら同時に十分に対象化されるべきものであったのである」。執筆者が指摘するこの問題は、本書10章および終章においてより十全に考察されている。ともあれ、本章は「戦後の思想空間は、敗北の苦渋を嘗めつくすところから思考されなければなるまい」と結ばれている。

第2章は戦後啓蒙の「学知」を代表するもう一人として丸山眞男が扱われる。丸山の思想史研究は、日本における「無構造の伝統の原型」を宗教言説において確認しようとしている。そこには民衆宗教論的な視点もあったが、その宗教理解、とりわけ仏教理解の不十分さが本章では徹底的に批判される。それは近代主義的な立場からする丸山の思想史研究の限界であり、「その限界を超えていくべく宗教史研究、宗教社会学研究へと踏み出そうとした意欲」もあったが、丸山の研究には「言葉の発せられる場についての配慮が乏し」と批判する。それゆえ指導的な知識層の思想分析は見事に行うことはできるが、民衆における「内面的宗教性」の理解には到達しえないものであった。本章は他の章と比較すると、その知的営為から「切実さ」を見出すことなく、宗教学、宗教史の立場からする批判に終始している感が否めない。この点に関しては、喜安朗による「あとがき」において補足され、丸山や大塚久雄らの戦後知の

初発を支えた知識人の言説は、戦後改革という外的契機の内在化・主体化の努力であったことが指摘される。「変革主体」としての民衆という歴史認識は、「学知であると同時に、戦後啓蒙にとって大きな意味をもつて」いた。それは専門書でありながらも、かつては「遠く社会に響き及ぶ言葉」（本書終章）でもあったのであろう。

第3章では竹内好によるイスラム研究の視角と今日的意義が、戦中期における回教研究所での活動と言説の中に分析されている。大状況における竹内の言説においては、時局に対してマキャベリズム的な戦術を使いながらも、他者の存在、さらにはその多様性までも認識すべきであるという主張がなされていたことが確認される。それは竹内の他者に対する感性によって裏打ちされている。文化や民族が実体的なものであり、その優位を主張する言説が主流を占める中であって、竹内は、「朝鮮人」であろうと「中国人」であろうと「人間はみな同じという発想」を持っていたことが指摘される。イスラム文化の複数性、今日的にいえば文化の土着化と多様化、さらには文化の多声性が認識されている。こうした視角は、現在のエリアスタディーズの先駆をなすものとして再評価されている。

第4章では批評家であるとともに市井の研究者であった吉本隆明が取り上げられる。初期から一九六〇年代までの作品にみられる吉本の宗教観と宗教性に焦点を合わせ、その特徴が考察されている。吉本は「天皇制の宗教としての基本構造」を説明することの重要性に拘り続けてきたが、そのアプローチは「古代から現代へと話が飛んでしま」っている。吉本における近代

の天皇信仰や国家神道の形成過程の解明への「無頓着さ」や、古代に立ち返るべきことの「強調」には、彼の「共同幻想からの自立」という構想と、「自然」に即した生という「ユートピア的理念」が関わっていると指摘される。芸術によって疎外が克服される体験を自己幻想とし、同様に市民社会が国家や法から自然に回帰する状態が構想されている。吉本にとって、「自己幻想が共同幻想に呑み込まれずに、共同幻想との逆立関係を維持することができる」ときは、『自立』と呼ばれる。それゆえ、古代の「宗教としての天皇制」の原型を究明し尽くせば「宗教としての天皇制」は「無化」されると論じられた。「これはある種の「宗教」からの解放が根源的「自由」につながるというユートピア的ヴィジョン」であり、「思想性を持った宗教は自己幻想を屹立させるような性格をもっているはずだ」として、宗教的な主体の問題へ接続され、「マチウ書試論」を中心的に検討している。「極端化された倫理規範を突きつけ」る思想的な宗教は、「全体性を喚起し、強力なアイデンティティを提供する」。つまりそれは「超越的な参照軸をもつことで、全世界に向き合うことができる思想」であり、「ラディカルな超越的参照軸をもつことで『自立』することに高い価値をおく」、吉本の業績について周到な宗教学的な解釈がなされる。続いて、「しかし、そのような強烈なアイデンティティを提供する思想は、同時に、受け入れえないものを排除する思想ではないだろうか」という問題が提起され、他者の抽象化をまぬがれつつ全体性を認識すること、また、アイデンティティの「排除機能」を回避することという「二つの命題のあいだで吉本は立

ちすくんでいる」と、吉本の逢着した問題点が今日的観点から指摘されている。

第5章では、「宗教研究者でありながらも歴史学の領域に切り込み、先駆的な成果を残した」村上重良の『近代日本民衆史研究』と『国家神道』の二冊が検討されている。また村上の現実社会への関わりとして政教分離訴訟と共産党との関係が検証されている。まず、東京大学において制度化された戦後宗教学における村上の学問的な位置づけが検討され、マルクス主義者であった村上とリベラリストであった岸本英夫は政治的なスタンスは違うものの「宗教学の実証性・科学性を疑うことなく強調していた」ことが確認される。村上の研究は、封建社会を乗り越えるような前進性が民衆宗教において先行して達成されていたとするように、「自分が正しいと信じている近代宗教の価値観を対象に読み込みすぎている」。民衆宗教に対する村上の図式的な理解は、「七〇年代後半以降の、資料調査の進捗と宗教学理論の導入によって」乗り越えようとされてきた、と学史的に位置づけている。次に、現実社会へ関わりという知識人の姿勢が取り出されることになる。村上の『国家神道』は「不朽のロングセラー」となっているが、彼の説は歴史学者によって批判され、「錯誤や論証の甘さが訂正されてきた」にもかかわらず社会的な影響力を保持してきた。それは憲法学者、裁判官、政教分離訴訟の原告団によって受け入れられてきたことによる。またそれは厳格な政教分離を追求してきた村上の社会的な姿勢によるものだった。本章でもっとも注目すべきはこの「世代」の指摘であろう。ある特定の世代にとって、村上説

は切実なりアリティを持ったものであった。それは「戦中の軍国主義、天皇崇敬強制を体験した世代」であり、「戦中世代が戦後社会で自己形成した場合」の共通体験を持った世代である。こうした世代にとって村上の『国家神道』は「独自の迫力」をもっている。それは「戦中のファシズム期から戦後の民主主義への転換期を生きた当事者の時代認識に裏打ちされている」からであり、『国家神道』には、国家体制の転換と、個人的なアイデンティティの形成とを共鳴させる機能があった」とことが指摘されている。

第6章では中世宗教史研究者の黒田俊雄が取り上げられる。マルクス主義は世界の全体性についての包括的な知を提供したが、知を支えるアリティへの感受性を衰弱させる傾向があった。そうした弱点を乗り越える知的営為の一つとして黒田の顕密体制論と親鸞理解が検討されている。黒田は、アルチュセールのような構造主義的マルクス主義の影響を受け、日常生活におけるイデオロギー装置の問題を考える視点を持っている。顕密体制は、農耕儀礼や死者儀礼を含む様々な儀礼を含み、人々の生活の内部に深く立ち入って支配システムを作り出すと同時に、共通のコスモロジーの基盤の上で、正当・異端・改革という複雑なダイナミクスを可能にしてきた包摂的なシステムである。黒田が、独創的な日本中世史研究としてそのことを示した点は評価されている。しかし、親鸞の思想の中核には、人々の生活へのまなざしがあり、人間の根源悪の認識が「生活者の実態を踏まえた切実感に満ちた」表現となっているのであるが、黒田の親鸞理解はその次元にまで徹底していない。「マルクス

主義には、人間性の根源悪と死について考える枠組が欠けており、そのことがおそらく現代マルクス主義の困難の由来のひとつとなっている」とし、ここにマルクス主義歴史家としての黒田の限界をみている。

第7章では網野善彦が検討されている。網野は、マルクス主義の活動家として国民的歴史学運動に積極的に関わり、指導的役割を果たしていたが、嫌悪感を持ってこれを反省し、分析的構成的方法による歴史学を批判し、叙述的方法によって貫徹されなければならないことを主張した。これは石母田正の『中世的世界』に代表されるような「歴史研究上において理論を先行させることの誤りを強調し、実証を優先させ、それが成功すればそこから対象の法則性や理論も発見される」というものである。それは、「当時のマルクス主義歴史学が支配的だった戦後歴史学において、その内部にあって」このような認識を示し、『自前の思考の回路』を求めたものであった。網野は具体的個別的な「名前」を持った存在の実証的な研究によって、相互に異なる複数の時系列をもった対象を叙述的方法によって浮かび上がらせるという方法を徹底した。そして、ある一つの時系列に絞って明らかなにした研究が、『無縁・苦界・楽』であり、これは専門領域を越えてもつとも影響力を持った業績であり、日本における社会史の先駆的成果のひとつといえるだろう。それは「寺院などに成立するアジールの場を可能にするような社会関係とそこでの『自由』の性格を、無縁の原理として追求」することによって、網野の専門とする中世世界のみならず、現代から原始にまで到達するような次元、文明や所有を越えた人類

の根源的な社会意識の形態へと到達する次元を描いてみせた。それは「時代性の底を抜」いてしまうような超歴史的な次元である。網野にとってこのような「無縁」の原理は「人間の本質に根ざす」ものである。網野は、「自然を人間と対立するものと見て、それを『所有』し、支配・管理することのみに人間の本質を見出し、人間が自然の一部であることを見失ったときに、人間は破滅の道に進まざるをえない」という人間観を表明している。それは「太陽から空気、さらには人間自身の生と死についてすら『所有』し、管理しよう」とする「管理社会化する現代への危機感」に根ざしている。そして網野が行ったような、現代国家に対して「飛躍」を打つような主体的な構えを持った「学知」が必要とされることが主張されている。

第8章では色川大吉と戦後歴史学が扱われる。評者は、「宗教史研究」は民衆史と真摯に向き合うべきことを強調してきたこともあり、本章は特に興味深いものであった。本章では色川が研究活動に入る以前の人生遍歴から始まり、研究の批評がなされ、彼の個別的な経験とその歴史観との関係が語られていく。後半部では執筆者である安丸が、同じ「分流」にある色川の研究に仮託して「民衆史」の構想力を述べているのだとも思われる。安丸は、戦後歴史学を補完し、民衆的主体を発見したとする「民衆思想史研究」あるいは「民衆史」研究の研究史的な概括を拒否している。色川民衆史が捉えたのは「もつと異質ななにか」であり、「抑圧や差別や周辺から全体を捉え返すという」民衆史の立場は、あらかじめ予想することのできない「複雑な接合・混融・転換などが生まれ、思いがけないような

飛躍も起こる」ことを学ぶことができ、「また存在により添った思考をより深層的な次元へと深めてゆくことで、私たちは世界を複雑に媒介されたあるまとまりとして構想することができ」と語っている。おそらく宗教研究者や文化研究者たちが経験するようなフィールドでの出会いや驚き、あるいは感動や幻滅を、「民衆史」派の歴史家は詳細な民衆史資料を通して行っていると言えるのかもしれない。そして底辺や周辺から見つめることで、「専門家としての歴史家は、その構想力と構成力を介して歴史的世界の全体性に迫り、そのような仕方での自分の思想を語ることができる」としている。

第9章ではアカデミズムの制度に基づく民俗学（アカデミック民俗学）を支えた宮田登が扱われている。すでに「序章」においても「学知の制度化は批判性の喪失に結果しやすい」ことが指摘されているが、そのことが具体的に検討されているともいえるだろう。民俗学は、他の人文社会系の学問とは異なり、「在野から始まって、戦後の新制大学の制度改革の中でアカデミズム化を遂行した」。しかし、その代償は大きく、「アカデミック民俗学は、悠久の過去へロマンを投影することも、仏教伝来以前の固有信仰を語ることも断念したところで成り立」った。「悠久のロマンに代わるものとして、宮田は、人間の深層心理に着眼し、そこに民俗学を接続させて、面白そうな学問を演じて見せた。（中略）民俗学にとって宮田は、余白のような存在であった。形成途上のアカデミック民俗学を支えたのは、その外側について隣接科学との交渉を引き受けた、宮田のような世間師であった」と、宮田という知識人の生を一抹の哀しさを

もって評している。

第10章では柄谷行人と酒井直樹が扱われ、続く終章では「知と身体」という観点から、現代思想をもとに知の可能性が検討されている。物理的な外部を借定することではなく、自己同一性の脱構築や、認識主体と身体とのズレや差延の中にしか知は存在しないことが指摘される。紙枚の関係で十分に論ずることはできないが、これらの章は学知についての根源的な問いでありながら、抽象的、あるいは理論的な議論に終始するのではなく、靖国問題や東京裁判という戦後日本の初発時から現在に到る問題や、アジア・太平洋戦争をいかに理解するかという具体的問題と結びつけ、その理解を巧みに読者へ提供するのに成功している。これらの論考によって、確かに戦後知が遭遇した大状況や問題、問われるべき対象は明らかとなった。また、大学制度を身体のアナロジーで捉え、知的な主体をいかに形成するのかといった課題自体も提起されている。知識人にとつての研究や教育の実践は、一種の覚悟、信仰告白であるということも首肯できるだろう。しかし、そのための方法と実践はこれから鍛えてゆかなくてはならないことが確認されている。

あとがきでは、全体の議論を補足する形で、大状況の中に戦後知を位置づける必要性が指摘されている。戦後知の変遷における朝鮮戦争という大状況のインパクトについての説明が不十分であることが指摘され、また、本書で扱えなかった江口朴郎の帝国主義研究を焦点化することで、すでに到来したものとしてのグローバルゼーション批判とそれへの抵抗の起点がマルチチュード論との関連で示唆されている。

本書は、複数の執筆者からなる論文集の形態であるので文体の一貫性についてはさておくとしても、著者によって知の扱い方は異なっている。しかし、本書のさまざまな論考は、学知が、大状況の中で生きる人々の「切実さ」へ着目し、それを取り上げねばならないことを、いずれも指摘しているように思われる。宗教学の観点からこれを考えてみよう。宗教を単なる社会的心理的な病理現象であると捉えるのではなく、そこに独特な生の「切実さ」を見出さなければならぬことはいうまでもない。ただ、それは、どこまで研究者自身も否応なく巻き込まれている日常生活それ自体への真摯かつ原理的な問いになっているだろうか。「切実さ」をどこまで大状況の中に関連づけて把握する構想力を持っているだろうか。他者をいかに理解し、排除ではなく対話し、自らを特権化することなく、自らも変容する場を確保する可能性を考えることができているのだろうか。それは宗教学が大状況の中に戦後知、ひいては自らの学知をどう位置づけ、知的介入を行うのか、という問題であろう。

ちょうど本書が刊行された二〇一〇年一二月に発生したチュニジアでの暴動とジャスミン革命に始まりアラブ世界に波及していった「アラブの春」や、二〇一一年のニューヨークに始まった格差是正を訴える「ウォール街占拠」のデモは、現在世界各地に飛び火している。本稿執筆時の一〇月一七日、ワシントンで開かれたマーティン・ルーサー・キング牧師の記念碑完成式典に出席した、プリンストン大学教授であるコーネル・ウエストがアフガニスタン戦争への抗議活動中に最高裁判所前で逮捕された。後ろ手に手錠を嵌められ、人々の声援に送られな

がら連行されるその様子はインターネット上で世界に配信された。ウエストはアメリカ黒人研究や宗教研究に従事する研究者である。宗教研究者による、こうした一連の動きに対する応答を現在の日本で想像することが出来るだろうか。このことは何も宗教学に限ったことではないだろう。安丸が序章において指摘するように「わたしたちの学知は、いまのところ、そうした大問題を回避することで営まれている」のである。

本書に収められた各論文は、それぞれがきわめてウエルメイド(上質)である。これは一〇年間の研究会活動において十分に議論が重ねられ、また執筆者たち各々の、文体を含めた役割が成功した稀有な例であるともいえるだろう。これだけの分量をもち、これほどの射程を一冊に扱った書は近年稀であると思われる、それが評者も属する宗教学の業績として提示されたことは大きな喜びである。また「あとがき」では執筆者の一人によって本書の問題点や不十分さが的確に指摘され、かつ展望が示されてもいる。それは学的に真摯な態度であるとともに、後続の研究者である読者にとっては挑発的ですからある。こうした滋味に富んだ果実は若い研究者たちによって広く読まれるべきであろう。ただ、本書まえがきには「戦後知の先人の背中を追いながらも、次の世代にタスキを渡そうとしている」とあるが、これは些か都合のよい語りであろう。後続者たちが十分な脚力をつけるまで、執筆者たちには、どうかまだまだ先導を走り続け、走り抜いていただきたい。そう念願するのは評者ひとりではないであろう。

櫻井義秀編著

『カルトとスピリチュアリティ』

——現代日本における

「救い」と「癒し」のゆくえ——

叢書 現代社会のフロンティア13

ミネルヴァ書房 二〇〇九年一月三〇日刊

四六判 ㄨㄨ. + 二九四 + 五頁 三五〇〇円 + 税

深澤 英隆

本論集は、社会学の叢書という枠内で、カルトとスピリチュアリティ両現象が提起する諸問題をさまざまな角度から論じた、非常に意欲的な論集である。本書の大きな特徴は、方法論や研究関心について極めて自覚的かつ反省的に研究がなされ、論集が編まれている点にある。「はじめに」、「序章」、「あとがき」のいずれにおいても、編者が本書自身に精細な分析と自己検証を加えている。評者としては、それをさらに反省的に論評しなければならぬが、これは必ずしも容易ではない。また研究者の立場性の自覚ということも、本論集が重視する点である。この点で言えば、評者はまずワールドワーカーではない。スピリチュアリティに関わる現場には一定程度足を運んで見聞を重ねているが、カルト現象の現場を实地には知らない。評者としてそうした限界はあるが、以下ではまず本書の構成を掲げ、内容を順次紹介することから始めたい。